

たとえば、春の野の千里ばかり
 にくさのみちて候わんに、すこしき
 の豆ばかりの火をくさひとつにはな
 ちたれば、一時に無量無辺の火と
 なる。このかたびらも、またかくの
 ごとし。一つのかたびらなれども、
 法華經の一切の文字の仏にたてまつ
 るべし。

この功德は、父母・祖父母、乃至
 無辺の衆生にもおよぼしてん。

(御書新版1704ページ・御書全集1231ページ)

通解

たとえば、春の野が千里ほどにも広がって草が生い茂っている所に、豆粒ほどの小さな火を一つの草に放つと、いっぺんに無量無辺の火となる。(あなたが供養した) この帷子もまた同じことである。一つの帷子ではあるが、法華經の一切の文字の仏に供養したことになるのである。

この功德は、父母、祖父母、さらに限りなく多くの人にも及ぶに違いない。

真剣な思いが新たな道を開く

よくわかる解説

みなさん、こんにちは！ サンです！ 秋の深まりとともに、朝晩の空気がぐっと冷たくなってきたね。寒い時こそ求道心を熱く燃やして、御書を研さんしていこう！

今回学ぶ「棧敷女房御返事」は、1275年(建治元年)、日蓮大聖人が54歳の時に著され、鎌倉の門下である棧敷女房に送られたお手紙です。本抄は、棧敷女房が大聖人へ帷子(裏地をつけない単衣の着物)を御供養したことに對するお返事で、その真心をたたえられています。

その功德の大きさについて、豆粒ほどの小さな火でも、草の野に放つと、たちまち燃え広がるように、1枚の衣でも、無数の仏に供養したことになる、と仰せです。なぜなら、法華經の行者である大聖人への供養は、そのまま法華經に供養することに通じるからです。

さらに大聖人はこの功德は、父母、祖父母、さらに限りなく多くの人にも及ぶと断言されています。つまり、たとえわずかであっても、真心の行動があ

れば、無量無辺の大きな功德が積まれていくことを教えられているんだ。

ある未来部員の体験を紹介するよ。合唱コンクールを頑張ろうと決意していたそのメンバーは、クラスメートのやる気がなくて悩んでいたんだ。練習をしても、歌声がバラバラ。それでも、まず自分が変わろうと、唱題に励んだ。祈りの中で合唱を通して、クラスの団結を深めたいという思いが強くなっていったんだ。それから、勇気を出して「せっかく出るなら、本気で歌おうよ」と友達に声をかけると、その思いが伝わったのか、練習する仲間が増えて、本番で入賞を果たすことができたんだ。祈りを込めた真剣な一人の思いは、必ず届くということだね。

池田先生は語っています。

「千里の道も一歩からである。その一歩また一歩を、着実に、誠実に積み重ねていく人生が、最後は必ずかつのだ」

今年も残りわずか！ 悔いを残さないように、今いる場所で、勇気の一步を踏み出していこう！